

来年の150周年に向けてさらなる改革を進めたい

明治学院大学 学長
 鵜殿 博喜



うどの・ひろよし氏

1949年生まれ
 1972年 獨協大学外国語学部卒業
 1978年 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学
 1978年 明治学院大学一般教養部専任講師
 1982年 同助教授
 1990年 同教授
 2012年4月学長に就任

研究テーマは、18世紀ドイツ文学、思想、ドイツ敬虔主義、ディルタイの文芸論
 日本独文学会、日本ディルタイ協会、日本ヘルダー学会などに所属

横浜開港と同時に来日したアメリカ人宣教師ヘボン博士は、人々に医療を施し、ヘボン式ローマ字を考案して和英辞典を編纂。聖書の日本語訳も完成させました。また、日本の少年少女に英学を教えるため、ヘボン夫妻は1863年（文久3年）に横浜で「ヘボン塾」を開設。これが明治学院大学の淵源です。

ヘボン博士は明治学院初代総理であり、博士の生涯を貫く信念であった“Do for Others”を本学は教育理念として掲げています。言葉だけのものではなく、現実、目に見える理念として現在のキャンパスに受け継がれ、息づいているように私は感じています。そのことを最も明白に示しているのは、本学のボランティアセンターかもしれません。

1995年の阪神淡路大震災発生時に、自発的な救援活動として、多くの本学の学生が被災地に向かいました。そのことがきっかけとなり、学生と教職員とがパートナーシップを築きながら活動する学内の独立した組織として、ボランティアセンターは98年に設立されました。考えてみれば、ヘボン博士の活動は、現代という「ボランティア活動」そのものです。このセンターは、生まれるべくして生まれた組織と言っても過言ではないでしょう。

日本の大学のボランティア組織として先駆的なものと見られているようで、数多くの大学が見学に来られています。入試の面接では、「ボランティア活動が盛んな大学」だから志望したという高校生に思いのほか多く出会います。私はボランティアの「教育力」というものを高く買っていて、活動に参加した学生は様々な立場の人々のなかでもまれながら企画力や実行力、交渉力が鍛え上げられ、人間的に大きく成長します。本学の学生は企業から、「コミュニケーション能力が高い」「協調性がある」「順応性が高い」といった評価をいただいているようですが、それはこのような正課外活動の成果が表れているということかもしれません。本学の良き伝統として、今後も積極的に推進して

いきたいと考えています。

知名度UPだけでなく、中身を発信する

ブランド力向上を目指し、2004年頃から「ブランディングプロジェクト」に取り組みました。本学の存在を社会に一層知らしめるために、“Do for Others”という理念を新しいロゴとイエローのスクールカラーに託して、2006年から発信してきました。

知名度を上げるという点で、このプロジェクトは成功だったと私たちはみています。その次の段階としては、ロゴやスクールカラーで表わされるものの「中身」、この大学でいったい何が学べるのか、何が身につくのか、といった点をより明確にして発信していくことが重要です。これから大学に入りたいと考えている受験生や保護者などに対し、本学の特色ある教育の本質を理解して共感を持ってもらう、そうした広報戦略を立てていく必要があるのではないかと考えています。

さらに現在、2013年の創立150周年に向け、「21世紀ヘボンプロジェクト」を推進しています。「教学改革とキャンパスの設備拡充」「語学教育の強化と国際交流の活性化」「一貫教育の推進と地域社会への貢献」が、このプロジェクトの3本柱です。

「教学改革とキャンパスの設備拡充」としては、まず本学初の教育系学科である「心理学部教育発達学科」を10年に、すべての授業を英語で行う「国際学部国際キャリア学科」を11年に新設しました。そのうえで、今後さらに各学部の特徴を生かした教学改革を行っていかねばならないと考えています。2キャンパスの活用の仕方も模索しています。現在、東京・白金と神奈川・横浜にキャンパスをもっていますが、学部ごとにすっきりと整理されているわけではありません。都心回帰の大学が増えるなか、本学はどうしていくのか？ 新校舎建設やさらなる学部改組などを含め、慎重に検討していく予定です。

「語学教育の強化と国際交流の活性化」は、もとも

との本学の強みをどう活性化させるかという問題です。ヘボン塾にはじまる「英語の明学」の伝統は、現在も本学の教育の中に脈々と受け継がれていますが、組織が大きくなるにつれ、各学部学科の英語教育に対する取り組みも多様化し、必ずしも社会のニーズに合っているとは言えない面も出てきました。全学的なカリキュラム変更や制度変更を行って、「英語の明学」にふさわしい英語教育を再構築したいと考えています。そうした語学教育の充実を、留学やさまざまな国際交流に結びつけていきたい。海外のそうそうたる大学と提携している本学のアドバンテージも前面に打ち出していきたいと思っています。

地域に開かれ、地域に貢献する大学に

「一貫教育の推進と地域社会への貢献」という点では、これからも地域社会に開かれた大学を目指していきたい。港区と連携した「チャレンジコミュニティ大学」や横浜市民のための「ヘボンみらい塾」などに加え、両キャンパスにあるボランティアセンターもさらに支援していきたい。東日本大震災直後から復興支援プロジェクト「Do for Smile@東日本」を立ち上げ、これまでに1000人以上の学生を派遣しました。このような社会貢献をさらに進めていきたいと考えています。

本学のこれまでの改革は、その多くがボトムアップ式に進められてきました。個々の教員の意思をできる限り尊重しながら進めるので、軋轢は起こりづらい。反面、十分な成果とはいえないものもあったようです。教学改革、キャンパスのあり方など、いずれも待ったなしの課題です。

私は本年4月からその舵取りを任されました。この厳しい時代にかなる成果を収められるか、身の引き締まる思いです。